
One year Of life

夜河心太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One year Of life

【Nコード】

N3299Z

【作者名】

夜河心太

【あらすじ】

極普通の日々を過ごしていた山田直樹。中学3年生の親友の島原光太。ある日事件が起こり、直樹が犯人扱いを受ける。だが、それを庇う光太が犯人だと嘘の証言。

その日から光太のいじめが始まり、光太は光太は事故死。もう生きることには希望をなくした直樹は、自殺を決意。だが、ラルナという少女に助けられる。

「死ぬよりは生きてるほうがいいに決まってるでしょ」
そうして直樹はある世界に飛ばされた。

そこには何もかも新しい世界が待っていた。

ある世界の、直樹の物語が始まる。

プロローグ1（前書き）

初めまして。

夜河心太です。初投稿となります。
というかこういうの事態初めてです。（汗）
がんばって書いていこうと思いますので、
見ていただけたら、うれしいです。

プロローグ、結構編集しました。

プロローグ1

いつもと変わらない日常。学校行って、友達としゃべって、帰る。

「勉強なんかしなくたって、生きていけるさ」

そんなこと考えてたらいつの間にか中3。

後悔はしてないけど、ちよっとした罪悪感がある。

いいんだよ。うん。きつと。

今が楽しけれや、きつと。

俺は山田直樹^{やまだなおむね}。とある学校の中学3年生。

「おい。帰ろうぜ」

話しかけてきたのは、島原光太^{しまはみつた}。

中3になってから急に仲良くなった。頭が悪い。

「んなこと言ってもな……。俺委員会の仕事あんだけど」

「お？そうか。なんなら手伝うぜ？」

「手伝うんだったらちよっとは勉強してくれよ」

「なんだと！？貴様親友の心使いを無視する気か!？」

「分かった分かった。じゃこれ運んでくれよ」

「……。これ全部？」

俺は勉強はあまりしないが、平均はいつもいっている。

とまあ、いつもこんな感じで過ごしている。

これが変わるはずはないと思ってた。

……この関係を、崩したくなかった。

プロローグ2（前書き）

すみません。分かりづらい箇所がいくつかありましたので、

プロローグ結構編集します。ご迷惑をお掛けします。m（| |）

m

プロローグ2

「じゃあなーまた明日」

「おう」

いつものように学校の帰り道。俺は光太と別れ、家に向かう。

「寒いなー。うー寒い」

今は11月の下旬。もうじき冬だ。

「ん」

たしかあいつは・・・同じクラスの日向ひゅうががいた。
なにしてんだろう。

「おい。ひゅうがー」

「おわあっ!?!?」

「・・・そんなに驚くなよ」

「す・・・すまん」

「んで何して・・・ここ誰んち?」

「お・・・お前には関係ねえよ・・・」

「なんだよー。あ、まさか愛の告白って奴か!？」

「ちっ!?!?! 違えよ!?!?!」

「・・・そうか。まあ頑張れよ」

「おまつ・・・!」

俺は家に向かった。俺の家族は俺と母ちゃんだけ。

離婚して、父ちゃんが姉ちゃんを引き取った。

俺は引越したくなかったから、母ちゃんについていっただけだ。

「姉ちゃんどうしてるかなー」

そんな感じで家に着いた。

「ただいまー。おかえりー。」

母ちゃんは帰ってくるのが遅いからこんな寂しいヤリトリをしている。

悲しくなんか・・・ないんだからね・・・。

「寝るか」

俺は布団に潜り込んだ。

目が覚めたのは2時。(朝)

「ん・・・母ちゃんまだか・・・」

俺はコンビニへ向かうことにした。腹が減ったから。母ちゃんはいつも帰ってくるのが遅い。こんな時間でも帰ってこないから結構息子としては心配している。

自転車を飛ばし、おにぎり2個とあんまんを買ってまた自転車へ。

「とれーんとれーん走っていーけ」

独り言が多いのは癖だよ。気にしないで。

「・・・なんだ？」

暗いのに明るいところがあった。

「火事か!?!」

俺は自転車と飛ばして近くへと向かう。

そこは日向と別れた家だった。

「!?!」

もう遅い。火が家全体を燃やし、どうしようもない状況だった。

すると、家の庭から、男が走り去って行った。

「あっ! 待てよ!」

男は俺の自転車を奪い、猛スピードで逃げ去っていった。

「俺の飯がああああああ」

追いつかないほど、男は離れて行った。

「……とりあえず消防車を！」

俺は携帯電話を取り出し、消防署にかけた。

まあ俺より前に電話した人がいたらしく、

早くに消防車が到着した。

俺は警察に事情聴取をされるなど、面倒くさいことになっていた。

「ハア……」

もう4時をきていた。『中3が夜遅くにうるつくな。勉強しろ。』

とか罵倒されるはめに。ちえ……。

「オイ兄ちゃん……ちよつといいか？」

あゝ。これって絡まれてる？俺？

俺は自分を恨んだ。

（腹が減ったなら冷蔵庫ん中の調理すればよかったのに）

（なんで中3が夜遅くに……勉強しとけばよかった）

（なんで不良みたいなのに絡まれてんだ俺？というか集団は卑怯だろ

一人でこいよ。一人で。いや、俺喧嘩かなり弱いよ？）

俺は廃工場に連れていかれ、気づくと、病院のベッドの上にいた。

プロローグ3(前書き)

編集いたします。 m | | m

プロローグ3

俺は、病院で過ごしていた。しばらくの間。

医者に呼ばれて行ってみると。院長？的な人が真剣な顔で

「・・・いいか？これから話すことをちゃんと受け止めてほしい」

驚いたよ。声がでなくなっただなんて。

もともと俺は体が強いほうではなかった。

小さいころ「いつ倒れてもおかしくない」なんて言葉聞いてから
頑張っ生きてようと思っっていたけど。

病名は良く分からない。一生しゃべれないらしい。

まさか喉の病気だったのか？知らないけど。でも喉の病気なんかで
いつ倒れてもおかしくないは・・・ああ。わかんない。

でも一番は、友達や家族と話せなくなることが悔しかった。

小学校のころは、友達が少なく、中学校で、目立たない存在だった
俺を

助けてくれたのも光太だったし。母ちゃんにも迷惑かけてばっかだ
ったな。

思い返すだけで涙が止まらなかった。

別に死ぬわけじゃないんだぜ？ 分かってる。

じゃあ悲しむことないだろう？ 分かってんだよ。

自分でもなんで泣いているのか分からない。ただ、悲しかった。

俺は退院した。母ちゃんは俺の入院しているときも、来なかった。まあ仕事が急がしいんだろう。しかなたい。

携帯には、10件以上のメールが来ていた。幸せ者だな。俺。

だが、入院を始めて3日からは、一通もメールが来ていなかった。

俺は今まで通り、普通にいつもの道を自転車で行く。(買った)

やっぱりしゃべれなくなるのはちょっとキツイけど

今まで通り、接してくれるかな？

転校してきた時と同じような悩みを抱え、学校に到着。階段を上り、クラスの前に着いた。

(気持ちを切り替えて頑張ろう！)

俺は扉を開けた。

一瞬静まり返る教室。だがまた話や笑い声が始まる。

・・・なんだろう？この空気は。

俺は光太のところへ行ってみるも、こちらをチラ見し、どこかへい

ってしまった。

おかしい。何かがおかしい。

俺はいままで通り、授業を受け、放課後。

俺しかいなくなった教室。心が締め付けられるような痛み。

なんでこんなことになったんだろう。思い当たるのが全くない。

「直樹。ちょっといいか？」

光太だった。俺は光太と一緒に屋上へ向かう。

「コレ。見てねえのか？」

差し出されたのは携帯で、そこにはこの学校の裏サイトのチャットがあった。

「・・・」

答えることができない俺だが、そこには俺に対する悪口が大量に書かれていた。

『あの本田の家の火事の犯人、山田だろ？本当、最悪だよなー』

『本当。加奈子の身にもなってほしい』

本田加奈子？あの家の子だろうか？

『今度からアイツ無視しようぜ？まじきもいし』

『賛成くさつさと消えろつての』

光太が俺に問いかける。

「……コレ。本当にお前がやったのか？」

俺は首を横に振った。

「……だよな。俺はお前がそんなことするとは思えない」

じゃあ光太が俺を避けていたのは、俺としゃべっている光太が目をつけられるから……？

「お前はしゃべれなくなったから、悪口なんていいたい放題だ」

「……」

「ふつ。そんな顔するな。安心しろ。俺がなんとかしてやる」

「!?!?」

俺はとつさに携帯に文字を入力して光太に見せた。

『やめろ。何でお前がそんなことするんだよ。俺なんかほっとけばいいだろ?』

「……理由なんて要るのか？」

俺は真剣に光太を見た。

「友達だからだよ。それ以外なんでもねえ」

・・・俺は気持ちが悪くなった。

「・・・大丈夫。俺に任せろって。明日も学校こいよー」

そういうと、光太は、帰って行った。

俺は何も言えなくなった。ただの無口な人間になった。だが、こうやって俺を守ってくれる人がいることがなによりも嬉しかった。

その反面、嫌な予感がした。

その次の日も、俺は無視をされていた。

朝休み机に座っていると

「おーい。皆。聞いてくれ」

光太がクラスの多くの人に呼びかけた。

「どつした？島原？」

クラスの男子が声をかける。

「大事な話がある。」

「大事な話？」

俺は黙って耳を傾けた。

「本田の家を燃やしたのは、俺なんだ」

プロローグ3(後書き)

プロローグ・・・っていうか、

この前書きの長い奴。もう少し続きそうです。

すみません。(汗)

プロローグ4（前書き）

しつこいようですが、編集いたします。

プロローグ 4

「・・・え？」

クラスの皆は驚きを隠せなかった。俺が見たアイツは、光太だったのか・・・？

光太がそんなことするはず・・・

「じゃ・・・じゃあ、証拠は？」

そう。誰もが聞きたかったのはこれだろう。

証拠もないのに言っても、ただのデタラメにすぎない。

「証拠・・・ねえ。じゃあ、コレ」

そうすると、光太は携帯を皆に見せた。

人がぞろぞろ集まってくる。

それは動画だった。

「・・・!!」

動画で、本田の家を火事にする実況みたいなのをしていた。

「俺は心底アイツが嫌いだった。本当に・・・火事にしてよかったよ。」

俺の気持ちは少しは楽になったかな。はははは!!!!」

クラスの皆は、黙り込んでいた。

嘘だ。光太がそんなことするわけがない。

皆が黙り込んだ。

「まあ、警察はまだただの火事とでも思っているだろうな
っても、この中で誰かが俺を通報しても、れっきとした証拠には
ならねえからな。」

この動画は本当にそうなのかも、分かんねえからな。

警察に捕まることは・・・ないと思うけどな。俺は。」

クラスの人々が、ざわつき始める。

光太は、俺を庇ったのか？

俺は何もしゃべれない。そんな俺を庇ったのか？

「つつつ!!」

俺は放課後。光太をつれ、屋上へ向かった。

俺は光太の胸倉をつかんだ。

「なんだ？俺が本当にやったと思ってるのか？」

俺は首を横に振る。

「・・・まあ。いいか。俺はお前ともう一人。庇うことに決めたんだ」

俺は胸倉を離す。・・・もう一人？誰だろう。

「まあそのもう一人の奴が、火事にしたんだけどな」

「俺はしばらく学校にはこれない。どうせ、誰かは警察に知らせるだろう。」

まあ。俺は捕まんねえとは思うから、安心しろ。お前は、失った信頼を取り戻せ。俺のことは、もう忘れる。」

・・・そういつて帰ろうとした光太を引き止めた。

「・・・なんだ？」

俺は即効で携帯に文字を打ち込む。

『格好つけてんじゃねえよ。お前が庇う必要もないだろう？』

「たしかにそうだ。でもな、そいつがしたことは悪い。

だが・・・そいつを見る目が変わって周りの人が

そいつをいじめることになるのはもつと嫌だ」

・・・バカだ。馬鹿すぎる。やったがそいつが悪いんだから、ほっとけばいいだろうに。

「俺は人助けが好きなんだろうな。ははっ。まあお前は全く関係がないのに」

巻き込んでしまったのは謝る。すまないな。

俺ともう一人の奴・・・、そしてクラスメイトの皆とは、友達でいたかった。

俺は・・・自分はいいから、皆に幸せになつて欲しいだよ」

光太の言ってることは、よく分からない。
何かを守るには、自分が犠牲になったら、それこそ意味がないじゃないか。

その日以降、光太は学校には来なかった。

俺は裏サイトへいった。

『島原最悪だな。』

『ああ、山田じゃなかったのか。申し訳ない事したな・・・』

『とうかわるいの全部島原じゃん』

『もうずっと無視でよくね?』

心が苦しい。自分のことより、・・・他人の心配をしたのは初めてだ。

俺は少しずつ、信頼を取り戻しはじめた。でも、嬉しくはなかった。
俺は声が出なくても、何かできたんじゃないのか?
今更遅い後悔をする日々が過ぎて行った。

光太がこなくなつていったある日。

「おい。朝礼はじめるぞー」

普通の日常を取り戻した。だが、俺の気持ちは晴れなかった。

「・・・お前らに、伝えることがある」

「島原が、事故で、亡くなったそうさ。最近来ていないが・・・誰か何か知らないのか？」

誰も話そうとはしなかった。

先生は、周りを見渡し、落ち込んだ表情をする。

「まあ・・・それだけだ」

俺は・・・吐きそうになるほど、苦しかった。

「じゃあ・・・出席とるぞー浅川ー」

予想していなかった、最悪の事態。嘘だろ？・・・。くそっ、最悪だ。なんで・・・なんでこんなことになるんだろっ。

そしてクラスの反応

あれは必ず何かありそうさ。

俺は家に帰り、携帯で学校の裏サイトへいった。

そこには・・・

『死んだかWWW』

『事故死とかWWWウケルー』』

『ごまあWWWWWW』』

・・・何だよコイツら・・・俺は、携帯を力強く握り締めた。

プロローグ5（前書き）

編集は、ここまでです。
申し訳ありませんでした。

プロローグ5

俺は次の日、日向に声をかけられた。

そして、俺が分からないことを、すべて教えてくれた。

日向が本田の家を燃やしたらしい。

日向は、本田の家の所で、俺とすれ違った。

家が火事になった時から、本田は学校にはきていないらしい。

そうして、俺だけを、クラスの奴が目撃し、俺が犯人扱いに。

日向は、光太に打ち明けた。

そして、光太は、裏サイトのチャットを見て、

俺にも報告。そして、俺と日向を庇うことに。

そして、クラスメイトの皆に光太は告白。

その日から、光太は、クラスメイトからは、裏で叩かれた。

だけど、光太は、学校には来なかった。

そして

光太は、事故にあって死んだ。

「すまない……………」

泣きながら、俺に土下座をしてきた日向。

もう、何を恨めばいいのか、分からない。

でも。俺は、何もすることができなかった。

「おーい。何読んでんだ？」

「本だけど・・・？」

・・・出会いはこんな些細な会話だった。

それから俺と光太は仲良くなった。

そして光太の周りの奴たちとも、俺は仲良くなれた。

「なあ・・・なんで・・・俺なんかとかかわるんだ？」

「あ？悪いか？」

「いや・・・お前だって、皆に親しまれているしさ、なんか・・・」

「何言ってるんだ。友達だからだよ」

・・・全部、光太のおかげだった。

めっちゃくちゃ感謝している。

そんな恩人が、いなくなった。

俺は生きることとはどういうことか、考えた。

・・・分からなかった。俺は一晩中声のない泣き声を上げ続けた。

・・・俺は生きることの意味をなくした。

「電車が到着いたします。黄色の線より内側によってください」

俺は電車の通る線路へ飛び降りた。

「お．．．おい！君！何をしている！？」

俺をとめる声だろうか。ありがとう。おじさん。

母ちゃん。ごめんな。長生きしてくれよ。仕事は辛いと思っけど。

日向。お前は、自分に素直に生きろよ。

俺は、自殺を決めた。

電車が俺を通過した。

はずだった。

「ん．．．．．？」

「気がついた？」

そこには、女がいた。

「じっは……？」

真っ白い。奥行きが全く見えない場所にいた。

「全く……バカな男ばっかなんだから」

その女は中学……か小学校高学年の女。長い黒髪が特徴的で、白いワンピースをきていた。

俺は体勢を直し、体操座りをした。

「俺は……死んだんじゃないのか？」

「アンタが死ぬ直前に、ここに連れてきたわけよ」

あきれた顔で言う。

「……でだよ……」

「ん？」

「なんで俺を放っておかなかったんだよ……！！！！」

「は……はあ！？アンタ助けてもらった人に対して何言ってるのよ！？バカ！！」

「うるせえ！誰も助けてくれなんか……言ってるねえだろ……」

急に思い出した。ここに来る前の記憶を。

「ハア・・・アンタとことんバカね。大バカよ」

「・・・・・・・・・・なんだよ」

「死ぬよりは生きてるほうがいいに決まってるでしょ」

俺は顔を上げた。

「あ、あのさ・・・パ・・・・・・・・パンツ・・・」

「え？きやあああああああああ！！！！なっ何見てんのよ！！」

ひっぱたかれた。

「つてえ・・・・・・・・・・」

「あっアンタにチャンスを与えようとしていたのにつ！！変態！！」

「ちや・・・んすっ？」

ブローグ完 オワリはハジマリ(前書き)

長くなりました。ブローグは終わります。

m () m

プロローグ完 オワリはハジマリ

「そうよ！チャンスよ！」

「んで？どんなチャンスよ？」

「アンタを前の世界と違う世界に連れて行くのよ。
そこで、新しい生活をしてもらうの」

「・・・は？」

「は？じゃないわよ！」

「や。何言ってるのかサッパリだ」

「だーからあ！！アンタは自殺しようとしてたでしょ？
それで、新しい世界に連れて行って暮らしてもらって、
生きることの喜びを、アンタに教えてあげようっていうわけ！」

（俺より短い人生の奴に何いわれてんだ俺・・・）

「そこで、いままで通り、暮らせと？」

「そうよ。さっさと理解しなさい」

「んで？暮らしたらどうすんだ？」

「はっ。」

「やあ。ただ暮らしても俺は生きようと思わないぜ？
一度は死ぬ予定だった人間だからな」

「ん〜。じゃあ、目的を果たしたら、その世界で暮らしても、いいわよ」

「目的？」

女が言う目的は、「存在を示すこと」らしい。

「は？」

「存在を示しなさい。あなたがその世界に来て、本当によかったと思われるような。」

そんな信頼を得なさい。そしたら、私が迎えに来てあげる」

なんか無茶苦茶な設定だな。オイ。

「・・・じゃあ、目的を果たせなかったら？」

「さあね？あなたの存在がなかったことになるんじゃない？」

「エ・・・」

「ははは。まあ、頑張りなさいよ」

「はははじゃあねえよ・・・」

「軽く設定いっとくわね」

そういうと、一枚の紙切れを読み始めた。

「あなたは中学3年生から1年間。何もかも、新しい生活をしてもらいます。」

そこで、目的を果たしてください。

いろいろと詳しいことは説明しませんが、慣れてください」

「だってさ」

「じゃねえよ！何だその適当な内容は！？」

「うるさいわねーお父様の言うことなんだから」

「お父様？」

「ああ。言っでなかったわね。私、ラルナ。アンタみたいな救い用のないバカに

救いの手を差し伸べる仕事をしているの。まあお父様が社長？みたいな？」

「ふ〜ん」

「じゃあ。1年後。会えたら会いましょうね〜」

「わつつつ!!!???.?」

周りが光に包まれた。

そこには、見たことのない風景が待ち構えていた。

1 (前書き)

プロローグも終わったんで、本編いきます。

長い話が結構あります。すみません。

見てくださっている方々。宜しくお願いいたします。

「……………え？」

見たことない景色。前とは全く違う世界が広がっていた。

言葉を失った。夢？ああ。夢オチって奴だな。きっと今までの全部夢だ。くうく。久しぶりに刺激のある夢……………。

「どこだここは！！！！！！！」

俺は叫んだ。周りの人が見渡す。

ここは商店街か？やけに騒がしい。

「あー！いたいた！信ちゃん！！何してんの！！」

何か大声で女の人が呼んだ。さて、俺はいろいろ調べるそうさ。そうさ。

さっさとどこかへいかなきゃぐへっ？

「ちょっと！何シカトしてんのよ！早く来なさい！！」

俺は首を？まれた。え？俺？信ちゃん？どちら様？

俺はぐいぐいひっぱられる。

「ちよつ。まっ。つて。」

「あ？ああ。ごめんごめん」

その女の人は背の高い。ボーイツシユな髪が印象的だ。ああ。俺のタイプか？

「んで……どなたですか？」

「はあ？何ふざけたこと言ってんの？あんたのお姉ちゃんでしょ？」

……

そういつて姉らしい人について行くと、『田山』の表札があつた。

「ただいまー」

「あ、おかえりー」

その人は、長い黒髪がとても綺麗なおとなしそうな人だ。ああ。俺のタイプか？

「あ、信ちゃん。おつかいは？」

「ほえ？」

マヌケな声が出た。考えてもらいたい。突然知らないところへ飛ばされて、知らない人におつかいは？ははは。

分かるわけないじゃん!!!

「……クスツ。ほんとドジなんだから。まあいいわ。」

俺は家の中へ入って行く。リビングでは、男の人がゲームをしていた。

「ピコピコ……くそっ！ここで魔王を倒さなければ……いつ倒すんだよっ！」

すごく熱中していた。

「お？お帰り。我が弟よ。見よ。兄上の勇姿を……あああああああああ！」

この人が兄……？ちよつと残念だ。

「……まあ料理は私と麻里まりで作つとくから、自分の事してなさい」

俺は2階へあがる。なんだこの流れは……いったん落ち着け。俺。

俺は部屋をあけまくって、俺の部屋らしい部屋を見つけた。状況を整理しよう。

- ・自殺しようとして、変な女のいる空間へ連れてかれた。
- ・んで、頑張ったら、その（この）世界で暮らしてもいいらしい。
- ・んで、この世界での俺の名前は……ん？田山信たやましん……なんだ？
- ・まあ女の人2人と、男の人からして、俺は弟だろう。

ふう。ん……？この部屋の状況からいい、引越したばかりなのか？

ダンボールを片つ端から空けていく。教科書？

そこには、田山信たやましんいちと書かれていた。

「じはんよー」

下から声が聞こえる。よし。飯を食ってから考えよう。

リビングのテーブルに座る。

「明日から新しい学校生活だねー。楽しみ？」

麻里・・・さんだったかな？その人が声をかける。

「フム。楽しみではあるが、不安なところもあるな」

厨二病な兄が答える。

「うん。楽しみだよ」

続いて俺も。

「ふふつ。よかった。私たち2人は、まだ大学は始まんないから、この地域のこととか、いろいろ知っておかなくちゃね？」

麻里さん。きつといい人だな。

「えー。調べんの？面倒くさいなー」

名前は・・・まだ知らないな。心もボーイッシュそうだな。

そついいながら、ご飯を食べ始める。シンプルな和食だ。

「うまつー！？何コレ！？」

つい声に出てしまった。

「え？毎日食べてるじゃん？急に何を言い出すの？」

麻里さんじゃない方が言う。そりゃ俺はほとんどコンビニだったからわ。

「まあまあ。栞しお。そう言ってくれただけで嬉しいじゃん？ありがとうね。信ちゃん」

栞さん。よし。ちよくちよく名前を覚えてきたぞ。あとはこの

「毎日美味しくとても感謝している。ありがとう」

厨二病の兄だけだな。あ。この家の母・父も知らないな・・・

「へいへい。空気は読めるんだから。孝平こうへいは・・・」

「ははは。ありがとね。考ちゃんも」

孝平。よし。だんだんと分かってきた。よし。食べ終わった。ごちそうさま。

俺は風呂に入り、寝た。

『おはよー』

声が聞こえる。登校中の風景。

『うーっす』

光太？あれ・・・俺って確か・・・

『おう。おはよう』

ほかの世界に飛ばされたんじゃ

「つつっ!?!?」

・・・夢？馴染みのない空気。俺は本当にほかの世界に飛ばされたのか・・・
階段をおりる。

「おそいわねー。転校してきたんだからもっとシャキッと・・・なんで泣いてんの？ 안타」

「・・・え?」

俺の目から涙が出ていた。なんでだ?」

「・・・まあ、飯食ってさっさと行きなさい」

「うん」

確か栞さん。俺の姉らしい。麻里さんと兄はいないみたいだ。俺は速攻で食って、制服に着替え、出かける。

「いつてきまーす」

「はいはい。・・・アイツなんか変ね」

学校は結構近くにあるらしい。歩けば見えてくるとの事。

俺は心中、学校なんてどうでもいいと思っている。

光太が死んだ。その事実を受け止めるのにも苦労したのに、違う世界に飛ばされて、目的を果たせと。

「別に俺なんて・・・どうでもいい存在なんだろうに」

いつも静かで、勉強も普通。唯一自慢できるのは・・・部活か・・・
いや、それは昔の話。すべて忘れよう。

「ったたたた・・・」

俺と同じ制服の生徒の女がいた。転んだのか？
俺は通り過ぎる。

「ちよつとアンタ！か弱い女の子が転んでいるというのに、何もしないの!？」

「え……。じゃあ頼めばいいじゃん。普通に」

「言わなくてもするのが男ってもんでしょ!？」

「じゃ転ぶなよ」

「あつ!ちょ……。ちょっと!」

俺は学校へ向かう。

「ねえ君……。何年生？」

「3」

「あつ同じじゃん。何組？」

「あつそういえば。何組だっけ？」

「なんで知らないの……。転校生？」

「そうそれ」

「あ!じゃあ私と同じクラスだと思っよ? 転校生くるっていったたし」

「ふーん」

そんな感じで学校へつく。

かなり広い学校のようにだ。

「あつ。緑川先生！おはようございます！」

朝から元気だなコイツ……。

「おはよう。あら。田山君。おはよう」

「あれ？もう俺のこと知ってるの？」

「あはは。担任だからね」

「ああ。そうですか……」

綺麗な人だった。

「何暗い顔してんの。緊張してるの？」

「まあ……そんなところです」

「あはは。すぐに慣れるわよ。とりあえず……職員室に行こうか。
じゃ。海原さん」

「はい。じゃね。田山……君だっけ？」

「ああ……山田だけだな」

「ん？」

「いや、なんでもない」

その後、職員室へ行き、いろいろな説明を受けた。
そして教室へ向かう廊下。

「部活は何してたの？」

「野球してたんですけど、怪我でやめました」

「情けないわね・・・根性で直しなさいよ」

「先生はSですか？」

ガラツ「はい。皆席についてー」

「・・・じゃ、空気読んで入ってきてね・・・」

「へ？」

俺は教室には入れず、廊下でまってるの事。

「はい、今日は新しい学年ですが、転校生がきまーす」

ガラツ。

「・・・へ？」

教室がしらけた。

「・・・あのね。空気読んでっていったよね？」

「え！？あのタイミングじゃないの!？」

「じゃもっかいするから、廊下でて。ほら」

「え？あつ、ちよ」

教室は笑い声が聞こえた。何なんだこの先生は・・・。

『はい。えー。名前は、たやましんいち田山信一君。』

ま・・・まだか？

『 中学校・・・って何処かな？まあその出身らしいよ』

くそっ・・・まったくタイミングがつかめない・・・っ！

『・・・・・・今でしょ!!!!』

ガラッ「分かるかあつあああああ!!!!!!」

俺は教室へ入る。

「えー。分かるでしょ」

「分かるわけないだろ！ややこしいわ!!!!つかこのくだりいるか！

「？」

やはり笑い声が。こんなので面白いのか……？

「あはは。まあ自己紹介してね」

「はあ……山……田山信一です。一年間？短いですけど、宜しくお願いします」

パチパチと、拍手が聞こえる。

「グスツ……田山君……後一年しか生きられないのね？」

「死なねえよ！」

「はい。あの席へ行って頂戴」

窓際の後ろのほうの席だった。
何かテンションがおかしいな俺。

「よ。お前面白いな」

前の奴が声をかけてきた。

「……そうか？だいたいあの先生が変なだけだろ」

「ははっ。でもあの先生26だぜ？」

「……そこ関係あるか？」

「んーないか？まあ俺坪倉びんくわ。よろしくな。」

「ああ。よろしく」

短髪で、背の高い、がっちりとした奴だった。スポーツしてそう。

「はい。今日は先生機嫌がいいので」

『おお！！！』

な・・・なんだ？

「転校生も来たしー」

『おおお！！！』

「なのでー」

『おおおおお！！！！！』

「抜き打ちテストしまーす」

ガラガラガシャーン。人が一斉に倒れこむ。

・・・こんなところで一年過ごすのか？

3 (後書き)

キャラ固めるの。難しい。

4 (前書き)

題名がOne yearだから「365話でおわらそう」

という幻想は幻想で終わります。

人間は愚かな生き物だ。

人々に信じあえる心があれば、誰もが幸せにくらせるだろう。戦争なんて起こるはずもない。

自分の存在はなんだろう。

自分はなぜ生きているのか、分からない。

俺は一度死のうとした人間。生きる理由も見つからない。

なら……。何で光太は俺を庇ったのかな。

光太が声をかけてくれなかったら俺はただの暗い存在だった。そっぴいえば前に『友達だから』みたいな事言ってたっけ……。

アイツはただのお人よし。それだけか？

あの女は俺にチャンス、もう一度生きる希望を与えてくれた。それはどういう意味だ？ 考えろ、考えろ俺……。

……ダメだ。『存在』それはどういう意味だ……。

「い。　　おい。　田山くーん」

「はっ！……」

「この問題ー解いてねー」

「ほえ？」

「田山・・・お前は頑張った・・・」

前の席の坪倉が言う。

「・・・ん？」

俺は問題が解けなかった。つか寝てた。

「いってらっしゃーい」

「お前のことは忘れないぜ（グッ）」

後で聞いた。緑川先生の授業で寝てた人は、

外周30周らしい。

「くそ・・・」

俺は耐えた。耐えて耐えて耐えまくった。

そして2時間後。

「」

「お疲れ様。また寝たら走れるわよ？」

「ハア・・・やっぱ・・・ハア・・・先生・・・Sですか・・・」

こっちの世界に来て、何日か過ぎて行った。
結構慣れてきた。

俺の気持ちは晴れなかった。

この世界でも、前の世界でも、俺の気持ちは変わらないと思う。

「光太……」

ベットの上で呟く。

今日は日曜日。何もする気になれなかった。

「……腹減ったな……」

俺が降りたら、2人の姉と1人の兄と……もう一人いた。

「………何しに帰ってきたのよ……」

栞さんが男に向かって言う。

「何って……仕事が終わったんだよ」

「終わったじゃねえんだよ！！てめえがそんなだから母ちゃんを
死んだんだぞ！？」

兄が言う。……死なせた？

「・・・アイツが勝手に死んでっただけだろ？」

「てめえ!!!」

「や・・・やめろよ!」

俺は兄を抑える。

「放せ!!母ちゃんじゃなくてアンタが死ねばよかったのよ!」

「アンタじゃねえだろ。父親なんだから」

「アンタなんて父親じゃない!!!」

栞さんがそう言うと出て行く。

「まっ・・・まっつて!!!」

それを追いかけるように麻里さんも出ていく。

「チツ・・・行くぞ。信」

「あ、うん」

俺は父親らしい人の顔を見て、出て行った。

4人で近くのファミレスに行った。

「ああああああああイラつく!!!!」

「ちょっ…ちょっと…もうちょっと静かに…」

周りの人がコチラを見ている。

「何よ!アンタ居候の癖に…!!」

「そっそれは関係ないでしょ!?!」

へー。麻里さん居候なんだー。

…
…
…
…
居候?

「今は関係ないだろう。それよりあの男をどうするかだ…」

厨二くさい孝平(兄)が言う。

俺は何も知らないから口は出さないでおっつ。

「んっ…」

「…」

「……」

「……」

「時間が経てばどっか行くんじゃない？」

え……何言ってるんだ俺……。

「時間で解決できることじゃないのよ!！」

あっさり栞（姉）に一刀両断。

「……だよな」

ああ。この空気やだ……。

「ああああああ!！」とにかく何か食おう!！」

栞さんが言う。

「そ……そうだね」

「フム。食ってから考えるとしよう」

皆は注文を頼み、食い始める。

家に帰ると、父親は消えていた。

6 (前書き)

故郷・・・？へ行ってきました。

「はぁー・・・」

登校中。俺はいろいろと考えていた。

「よーっす。田山ー」

・・・坪倉か。

「・・・」

「どうしたどうしたー。元気ないぞー」

「お前に関係ないだろ」

「何だ？恋か？・・・あつ、おい！」

何かコイツと関わってはいけない気がする。

「朝から何してんのアンタ達」

現れた女子。・・・えーつと海原だっけ？

「何かアイツ逃げるんだよー」

「アンタが図々しいだけじゃない」

「えー？それはないだろー。なー？田山ー？」

「とっ……泊まるのはホテルか？」

「や。温泉だけど？」

「せつ……先生っ！！田山が飛び降りようとしていますっ！！！」

「はっ……放せ！！温泉なんていつてられるかああああああ！！！」

「田山君落ち着きなさい。また走りたいの？」

「えっ……それは授業で寝てた人だけじゃないんですか？」

満面の笑みで言った。

「授業を妨害する子もね」

「……」

「はい。まあー実行委員決めるわよー誰かー」

スツ。とメガネをかけた男が挙手。

「私がやりましょう」

「おお。佐藤君。やってくれるの?」

「はい。私はこの合宿がこの学校での一番の思い出になることを心から」

佐藤の動きが止まった。

「せつ……先生!!虫が佐藤にとまったようです!!!!」

……佐藤は虫が苦手らしい。

「ほっときなさい……もういいわ。田山君。やって」

「なぜ命令形なんですか!？」

「君が一番授業を妨害してるからよ」

こうして、俺、田山信一は、合宿の実行委員に決まった。

6 (後書き)

席の順番は、出席順ではないです。
きっと、緑川先生の何かだと思っています。

「やつほー。元気にやってる?」

朝起きたらへんな女がいた。

「・・・誰?」

「はぁ・・・本当にバカね」

えーと。ラルナだっけ?

「バカも何も・・・なんで俺の部屋にいるの?」

「途中経過よ」

「はい?」

そついうと紙切れを出して読み始めた。

『どうも。山田直樹君。私がそこにいる女の子の父親。

ゼルという。宜しく。話を戻すが、君はこのままだととても
目標を果たすことができない。』

「別に目的とかどうでもいいっ痛い!!!」

「だからアンタ理解しなさいよいい加減!!!!」

また続きを読み始める。

『ちよくちよくと目標達成を目指して行かなければ君の存在自体がなくなってしまうよ』

これだけは私の力ではどうにもならない。じゃあ。がんばって』

「意味わかんねえよ!!!」

「アンタずっとクラスに溶け込もうともしてないじゃん」

「だって俺は一度死ぬはずだった・・・」

「だ・か・ら!!!もっかい頑張ればいいじゃない!!!それだけのことでしょ!？」

「なんで頑張んなきゃいけねんだよ!!!」

「アンタの存在が消えるのよ!?!それでもいいの!?!」

「別にいいよ。俺なんてどうでもいい存在なんだから・・・って!？」

ラルナがボロボロと泣き始めていた。

「えっ!?!ちよ・・・えっ!?!」

「・・・なんで・・・分かってくれないの・・・?」

「...というか・・・なんで泣くの?」

「うつうつるさい!」

顔が真っ赤だ。

「とつとにかく!!頑張りなさいよ!」

そついうとラルナは消えていた。

「・・・何なんだろうな・・・俺・・・」

思い返すと自分が良く分からない。友達が死んだから俺は生きることを躊躇った。

俺はそれほど光太に感謝している。

ほかの奴から見ても何も思わないかもしれないが、感謝しきれないほどの感情を持っている。

たぶん母ちゃんが死んだら俺も死ぬだろう。

・・・俺は弱い。

『ごはんよー』

下から麻里さんの声が。

今日は代休かなんかで休みだ。俺は飯を食い終わると出かけることにした。

「どこかでかけるの?」

麻里さんが聞く。相変わらずきれ

「うん。ちょっといろいろ見てくる」

「そっか。まだあんまり慣れてないもんね。じゃあ、気をつけて」

「行ってきます」

「さて・・・どこへ行くの?」

近くの公園に行くと、小さい女の子が泣いていた。

「・・・どうした?」

「うわああああああああん!?!」

「え・・・どうしよ・・・」

とりあえず一緒にベンチにすわり、泣き止むのを待つ。

「ぐすっぐすっ・・・」

「・・・迷子か?」

「ブンブン」

「・・・違うか・・・どっか怪我したのか？」

「ブンブン」

「・・・おなかすいた」

「・・・へ？」

「一緒にコンビニへ向かい、パンとおにぎりを買う。」

「食べるか？」

「コクリ」

食べ始めると笑顔になった。

「んー。家どこにあんの？」

「わかんない」

「やっぱり迷子かよー!!」

「ぐすつ・・・ごめんなさい・・・」

「いや!!!いいんだ!!!人間間違いはあるもんだ!!!」

「・・・田山」

ビクッ。となった。俺の後ろに女が立っていた。

「おねえちゃん!..!」

そっぴうと女に抱きついていた。

「えっと・・・」

「谷口たにくちよ」

「おお。よろしく」

「同じクラスじゃない」

「え・・・まじか・・・すまん・・・」

「いつも静かなのにな。さっき千春ちはると話してたみたいにするばいいのに」

「・・・なんだろうな。俺でも良くわかんない」

「・・・そっぴう。じゃあ。ありがとう。山田直樹君」

「ああ。・・・ん?」

気づいた時は、もう谷口と妹さんはいなかった。

「なんだっただんだ?」

7 (後書き)

テストやだ。テストやだよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3299z/>

One year Of life

2012年1月6日12時47分発行